逃走とその不可能性
―モーリス・ブランショの「転向」の問いに向けて―

中田　崚太郎

要旨

本稿は、エマニュエル・レヴィナス「逃走論」における二つの「逃走」の区別を理論的枠組みに設定した上で、モーリス・ブランショの 1930 年代から 40 年代前半におけるテクストを読解することによって、ブランショのいわゆる「転向」という問題を明らかにするものである。つまり、「転向」の内実をブランショの思考の変遷として記述するものである。まず革命論の読解から、ブランショの革命の理念が「不可能な外部」への逃走可能性という論理、そしてその外部が革命主体の特権的な内面性であるという論理によって支えられていることを明らかにし、それらのロマン主義的な逃走の論理がテロリズム論から文学論、「分派」論に至るまで反復して現れることを示した。次に、36 年の短編「牧歌」においてブランショは逃走の不可能性という論理を主題化していることを分析した。そして 40 年代前半の文芸評論の読解によって、ロマン主義的な逃走からその不可能性へというブランショの文学言語論の変容を明らかにした。

キーワード：モーリス・ブランショ，転向，革命，文学言語論，レヴィナス，逃走

1. はじめに

作家モーリス・ブランショの経歴の始まりが、1940 年代の初頭、つまり第二次世界大戦の勃発に前後する時期であることは長らく文学史的な常識であったが、戦前の 1930 年代における彼の政治的な文筆活動という新たな事実がそれに加わることになった。その新たな事実は厄介なことに、「極右」、「シャルル・モーラス」、「反ユダヤ主義」、「対独協力」といったフランス現代史の暗部に関わる非常にセンセーショナルなものであり、しかも「デタッチメント」、「孤独」、「慎み深さ」といったブランショについての旧来の常識はその衝撃を倍加させる方向に働いた。新たな事実が旧来の常識に加わることによって、両者の境界という問題が生じることになったが、それは多くの場合、政治から文学へという「転向」の図式で語られた。そのようにして、分析の解像度が低いだけでなく、テクストに基づかない安易な推定が流布することになった[1]。

本稿の目的は、モーリス・ブランショの「転向」を、テクストの読解に基づいて解明

すること、つまり「転向」の前後でブランショのテクストに起こった変化を記述することである。それは彼の政治的過去の断罪でもなければ、両大戦間期フランスの政治状況の分析でもない。のちに 20 世紀後半のフランスを代表する批評家となるが、1930 年代当時はまだほとんど無名だった一人の文筆家が辿った思考の痕跡を辿ることである。

しかしながら事態は、「転向」という言葉が喚起するような「一方から他方へ」という単純な図式を取らない。というのも、問題になるのは「政治」と「文学」という二つの領域、制度ではないからだ。問われるべきなのは、「思考」そして「エクリチュール」という同一なものの（ゆえに容易に分割できないものの）二つの側面である。ジャン＝リュック・ナンシーの表現を借りればそれらは、「紋切り型の信念や、猛々しいがゆえに必然的に短見だった確信によって燃え盛っている精神という側面」と「極限まで、極限によって張りつめられた一つの思考という側面」[2]であり、あるいは「分別を欠いた［…］冒険の不透明性」と「極限というもののもつ無限性」[3]ということになる。

我々は二つの思考の区別を仮説として立て、それを以下で論証していく。その区別を導入するにあたって、参照したいのがエマニュエル・レヴィナスの「逃走論」（1935 年）である。彼はそこで「逃走」（évasion）と「逃亡」（fuite）を区別し、前者を自身の主題とし、後者をその変奏としている。

> 逃走はたんに、「卑俗な現実」から逃走せんとするする詩人の夢から生じるのではない。われわれの人格を歪曲し、無化しかねない数々の慣習や強制と絶縁したいという、一八、一九世紀のロマン主義者たちの思いでもない。［…］こうした動機はすべからく、逃走という主題の変奏にすぎず、変奏は主題の深さに見合うものではありえない。［…］それというのも、これらの変奏は存在を問いただすものではいまだなく、有限な存在の制限を超越せんとする欲求に従うものだからだ。［…］それらが命じる逃亡は、避難所を探すことでしかない。脱出するだけではなく、どこかへ行かなければならないのだ。逃走の欲求は逆に、その冒険の途上に見いだされるどの停止点でも、同じものでありつづける。どれほどの道を踏破しようとも、この欲求の不充足が減じるわけではないかのように[4]。

変奏としての「逃亡」、つまり人間の有限性を超越しよう、有限な世界の外部に「避難所」を探そうとするロマン主義的逃亡に対して、レヴィナスが主題とする「逃走」とは何か。それは、「存在から脱出するようわれわれに促す」欲求であり、「脱出することしか望まない」逃走である[5]。

> 自我の自同性において、存在の同一性は繋縛というその本性をあらわにする。なぜなら、自我の自同性のなかで、それは自足せる安逸のかたちをまとって現れ、逃

走へと誘うからだ。このように、逃走は自己自身から脱出せんとする欲求である。言い換えるなら、もっとも根底的でもっとも仮借なき繋縛、自我が自己自身であるという事実を断とうとする欲求なのである[6]。

レヴィナスが主題とする「逃走」は、人間の有限性を超え、その不充足を満たそうとするものではなく、逆に「存在の自足せる安逸」[7]あるいは「われわれの現存の終身性」[8]を発見してしまうことに起因する欲求である。

この二つの「逃走」（以下で我々はレヴィナスによる概念上の区別を維持しながらも、術語としてはともに「逃走」を用いる）をパラフレーズすれば、それらは逃走の可能性と不可能性として定式化できる。有限性の外部としての「避難所」がそれ自体、「不可能な外部」であるとしても、ロマン主義的な逃走主体はその外部を希求することをやめない。つまり、逆説的ながらもそこには「不可能な外部」への逃走可能性がある。それに対して、レヴィナスの主題である逃走は、人間存在の不充足ではなく、その全き充足という事実に端を発するものであり、「もっとも根底的でもっとも仮借なき繋縛、自我が自己自身であるという事実を断とうとする欲求」であるため、それは端的に不可能なものである。それは、逃走の不可能性としての逃走である。

本稿の仮説は、ブランショの思考の変化としての「転向」は、レヴィナスの区別する二つの「逃走」としての変化、つまり逃走からその不可能性へという変化として描かれうる、というものである。ただ、この仮説はそれほど荒唐無稽なものではない。それというのも、ブランショの初めての虚構作品として 1941 年に出版されることになる『謎の男トマ』は、1932 年から書き始められ、30 年代を通じて執筆されたと言われているが、後年のブランショ自らの回想において、この作品は「消失（不在）の探求のなかで、存在（現前）を逃れることの不可能性に直面した」[9]と述べられているからである。

2. 「不可能な外部」への逃走可能性——「過激な革命家」の肖像

2.1 革命の論理

歴史学者ジャニーヌ・ヴェルデス＝ルルーは、1930 年代のブランショの政治的立場の数々を一語に要約するために「過激な革命家」という言葉を用いている[10]。では、「過激な革命家」とは何か。ブランショの場合、実践行動に訴えることはなかったため、その意味するところは「過激な革命の思想を表明している者」ということになろう。この章で我々は、30 年代におけるブランショの革命思想の過激さを明らかにするが、その過激さを支える論理こそ、「不可能な外部」への逃走可能性なのである。

ブランショの革命論が展開されたのは、1933 年 4 月の論文「革命に抗するマルクス主義」[11]においてである。まずはこの論文の構成を整理する。全体で 25 のパラグラフから成るこの論文は、内容から見ておおむね前半の 16 段落、中盤の 2 段落、そして後半の 7

段落という区分ができる。前半部分では、ロベール・ガリックの論文「なぜ我々は受け入れるのか」から始まり、中道的な順応主義による革命批判が紹介される。ガリックの主張を敷衍してブランショが紹介するのは、（当時のブランショ自身も含まれるであろう）実践を欠く理想主義的な革命家＝知識人たちによって構想されるような革命は実現不可能であり、行動を起こすためにはまず現状を受け入れる必要があるという順応主義のテーゼである。そして中盤部分でそのガリックの主張を批判的に受容するブランショの革命論が展開された後、後半部分でその革命論の基礎づけがなされる。

ガリックの順応主義的革命批判の読解からブランショが最終的に導き出す結論とは、「革命が成功しない限り、革命は不可能である」（Tant qu'une révolution n'a pas réussi, elle est impossible.）という奇妙な定式である。ブランショの革命論はこの定式に端を発するが、革命の不可能性とは彼にとって、共産主義革命の必然性の対極を意味するものであった。ブランショの共産主義批判は非常に激しいものであるが、彼の批判の中心にあるのは共産主義革命が必然的なものであり、結局のところそれは革命的な力を持ち得ないということであった。それゆえ、ブランショは革命の不可能性を重視し、強調するのである。

> 革命が成功しない限り、革命は不可能である。
>
> 困惑させられる結論だ。ただ、最も驚かされるのは、この結論が実のところあらゆる革命運動の正確な定義を含んでいるということだ。というのも革命は、ばかげていて信じがたい余分な存在であるものを増大させるのだから。つまり、革命が、依然として無傷であるように思われる社会を転覆させるはずのものである限り、革命はわけのわからないものであり続ける。革命は、世界を廃絶するという事実においてその全体を現出させる。ということは、この世界が存在し続けている限り、革命を思い描くのは困難であり、革命を現実として見なすことはほとんど不可能である。[…] 革命的であらねばならないのだが、それはつまり希望によってあるいは知性の卓越した調整機能によって、異なる社会にもう既に参入していなければならないということである。そうして革命をあらかじめ出来事として思い描かねばならない。革命の実現を信じるためには、革命の実在性を半ば信頼しなければならないのだ。（CP, pp. 106–107, 強調引用者。）

世界が現に存在しているという事実、これは極めて強力な事実である。そして世界を転覆させようとする革命は定義上、絶対的にこの世界に対して「余分な存在」であり、この世界の人間にとっては「わけのわからないもの」である。その意味で革命は不可能なものである[12]。その不可能性ゆえに、革命家はこの世界のただ中で「異なる社会」に「もう既に」参入している必要がある。その革命の不可能な様態を、ブランショは「革命の

実現を信じるためには、革命の実在性を半ば信頼しなければならない」（Pour croire à la révolution, il faut presque croire en elle.）というほとんどトートロジーに近い言い方で表現する。

結局のところ、ここでのブランショの企図とは、順応主義的な革命批判の定式「革命が成功しない限り、革命は不可能である」を、革命の不可能性として受け入れるのではなく、それを革命の定義に、あるいは革命の可能性の条件に反転させることである。ではなぜ革命の不可能性はその「可能性の条件」になるのか。

> しかしまた、革命の成功だけが埋め合わせる、革命のこの不可能性は、革命が決して必然ではないということに由来する。もし革命が必然だったとしたら、革命は無用のものだろう。革命は、それが置き換えようとしている事物の全体に対して相反しているため、[…] 事物の傾向の外に締め出されている。革命は、外部からの介入、諸々の出来事の根も葉もない創造、そして歴史的慣習の突然の殲滅を必要とする。[…] 革命はその偶然の起源から、最終的には瞠目すべき極限的な実在性を引き出し、革命を否定する者たちに対して、革命は不可能から必然への突然の移行であるということを絶えず示すのである。（CP, pp. 107–108.）

整理しよう。革命の不可能性がその成功によってのみ埋め合わされるというのは、「革命が成功しない限り、革命は不可能である」という先ほどの定式の言い換えである。そして、不可能な革命＝決して必然ではない革命は、史的唯物論によって必然とされる共産主義革命（ブランショにとっては「無用」である革命）の対蹠点を成す。決して必然ではなく通常は不可能だと見なされる革命だけが世界を根底から転覆することができる。それはその革命が世界の「外部からの介入」であるからである。

なぜブランショにとって革命の不可能性が革命の「可能性の条件」になるのかといえば、それは、現に存在している世界の中では考えることすら不可能な革命、言い換えれば「必然としての世界」に対する「不可能な外部」から到来する革命のみが世界を真に変革することが可能だからである。

以上の革命論の前提となる論理は、「必然としての世界」を逃れ出る「不可能な外部」というものである。ブランショの革命論の過激さを支えているのは、「不可能な外部」への逃走可能性という特異な論理、レヴィナスの言葉を借りればロマン主義的な詩人の夢なのである。以上の革命論を展開したブランショの次なる課題は、「不可能な外部」つまり「卑俗な現実」から離れた「避難所」を明示的に措定することであった。

2.2 「不可能な外部」としての人格

「不可能な外部」とは何か。ブランショはまず、革命を駆動する主体（的行為）として

「拒絶」（refus）という概念を提出する。いわく、「拒絶は［…］革命の中で最も純粋で最も脅かされているものを具現している。」（CP, p. 111.）つまり、「拒絶」はミニマルな形で革命の理想を体現しているが、同時にそれは非常に困難なものでもある。というのも、ブランショの革命論が「不可能な外部」への逃走という論理を前提としていたことから明らかなように、彼にとって革命は「必然としての世界」全体を否定し、歴史を断絶しようとするため、「拒絶」する革命主体は何事も肯定してはならないが（順応主義の拒否）、かといって「何もない」（rien）というアナーキーな混乱状態を引き起こしてもならない（虚無主義の拒否）からだ。ゆえに「拒絶」する主体は、「順応主義の拒否」と「虚無主義の拒否」という二つの相反する要請に引き裂かれることになる。この二律背反を回避するためにブランショが導入するのが、「拒絶」の主体である「反抗的精神＝反抗する人間」（esprit rebelle）そのもの、つまり「自己」（soi）である。

> 拒絶は拒絶自体を決して否認しないという条件を除いていかなる条件にも依存しない。［…］対立し破壊するという行為は拒絶を体現するが、その行為の力が最高度に達する地点において何らかの絶望的な肯定を示しもするのだ。［…］反抗的精神＝反抗する人間（esprit rebelle）は［…］反抗的精神に固有なものであり反抗的精神を具現する何ものかを執拗に探し求める。そして反抗的精神は驚異的な力に満たされたかのような自己を発見し理解する。この驚異的な力から見れば、反抗的精神を打ちひしぐ世界など取るに足りないものだ。［…］反抗的精神は自己を拠り所にし、それ自身と結びつく。（CP, pp. 111–112. 強調引用者。）

ブランショの「拒絶」は、「順応主義の拒否」と「虚無主義の拒否」を同時に遂行しなければならないというアポリアに陥っていた。この不可能な「拒絶」を基礎づけるためにブランショが採用する（むしろ、採用せざるをえなかった）知的戦略が、「拒絶」する主体の精神すなわち「自己」への回帰なのである。「拒絶」はたしかに「対立し破壊するという行為」なのだが、「拒絶自体を決して否認しない」行為であり、それは自己を否定しないということに等しい。クリストフ・ビダンが指摘するように「ブランショにとって拒絶とはその精神的属性以外の本質をもたない」ものであり、あるいはブランショはこの時、「拒絶を他の仕方で定義することが不可能である状態」[13]に陥っていたのである。そして最終的に「拒絶」を定義するためにブランショが召喚するのが「反抗的精神＝反抗する人間」の「人格」（personne）である。

> 今や反抗的精神＝反抗する人間は、この精神を守ってくれるはずのものとこの精神が守らねばならないものを同時に手にする。反抗的精神が行う拒絶によって、反抗的精神からこの精神の人格でないものがすべて消失させられ、反抗的精神は人格

的な実存として現れる。この人格的な実存の成就が最終目的なのであり、それは拒絶そのものの護持なのである。（CP, p. 112. 強調原文。）

整理しよう。まず反抗的精神を「守ってくれるはずのもの」とは「（反抗的精神の）人格的な実存」である（実存の成就が「拒絶そのものの護持」であるため）。そして反抗的精神が「守らねばならないもの」とは「反抗的精神の人格」である（反抗的精神が行う拒絶によって人格以外のすべてが消失させられるため）。以上のように、一方に「拒絶」の主体である「反抗的精神＝反抗する人間」が置かれ、もう一方にその主体の「人格」あるいは「人格的な実存」（existence personnelle）が置かれている。そこにあるのは主体とその人格という二つの極であり、お互いがお互いを守るという相互依存の構造である。主体と人格という区別があるものの、これがトートロジーに極めて近い閉鎖的論理であるということは明らかである。しかしこれこそがブランショの革命の論理が行き着いた帰結である。つまり、革命論の前提としての「不可能な外部」は革命主体の人格に一致する。超越的な外部性は、特権的内面性に回帰する。それが、逃走する詩人の向かう「避難所」となる。

「過激な革命家」ブランショの論理は 1933 年時点ですでに限界が露呈している（「精神主義的思考によって行き着いてしまった袋小路」[14]）。それは以後も 30 年代の彼の政治言説全体の通奏低音として鳴り響くことになる。繰り返せば、世界の必然性と全体性そのものに対立しそれを全面的に否定するための、「不可能な外部」への逃走可能性（および、それと一体となった「避難所」としての人格）という論理は、ブランショが政治ジャーナリズムから姿を消す瞬間まで反復されるのである。

3. 反復される革命の論理

3.1 テロリズムと文学

30 年代におけるブランショの政治言説として、ここでは 36 年のテロリズム論と 37 年の文学論を取り上げる。両者に共通して用いられるのは、「対立」という言葉である。33 年の革命論と同様の論理がここでも反復されている。

「ブランショにおいては 1937 年までの間、諸々の危機の高まりにつれて言葉の上の暴力が増長していくのを観察できるが、この暴力はレオン・ブルムへの罵倒と脅迫において絶頂に達する」[15]とローラン・ジェニーが指摘している通り、1936 年 7 月ブランショは「テロリズム、救国の手段」[16]を発表し、ブルム率いる人民戦線に対するテロリズムの必要性を公然と主張する。ブランショにとって、人民戦線は対ファシズムの左翼連合ではなく、日和見主義者やブルジョワ、資本家たちが集結した単なる利益集団に過ぎず、それは党派的な対立が消えた政治的無秩序であった。それゆえ、「指導者たちをして少しの間改善したという体裁を取らしめる恐怖（terreur）」を作りだすテロリズム（terrorisme）

に必要なのは、真正なる「対立」となる。

> ［…］対立は今日、少数の人間のみに宿る。彼らは、自由な思想のために身を捧げ、違法なそして必要とあらば過激な行動の危険を冒すのに十分なほど公平無私で自分自身を統御することができる人間である。
>
> 幾人かの人間と幾つかの組織の活動であるこの対立には、人員も資金も必要なく、強靭で公正な理念と偉大な感情だけが必要である。我々はこの対立が今日最も必要で最も実り多いものであると考えている。［…］ついにこの対立が、我々の下劣な体制を申し分なく修正するのである。（CP, pp. 378–379.）

ここで主張されるテロリズム＝「対立」は、少数精鋭でエリート主義的なものである。人民戦線を打倒できるのは、危険を顧みず断固として対立する姿勢を貫くことのできる人間だけであるとブランショは言う。そしてそのような人間は、利害にとらわれない「公平無私」な精神と「強靭で公正な理念と偉大な感情」をもつ。つまり、ブランショが要求するのは、テロリストの人格的洗練である。

1937 年 1 月の論文「革命から文学へ」[17]においても、ほぼ同様の主張が今度は文学の領域において繰り返される。ブランショはそこで彼自身の文芸批評の基準、つまり彼が文学作品に求める性質、価値を表明しているが、重視されるのは作品の「対立力」（la force d'opposition）である。

> より一層重要なのは、対立力である。この力は作品それ自体の中に表現されるものである。またこの力は、その作品と同じくらいにあるいはそれ以上に強力な新しい作品を誕生させる能力や、より高度な現実性を引き起こす能力によって測られるのと同様に、作品が他の作品を消し去ったり日常的な現実の一部を破壊する能力によっても測られるものである[18]。

「対立力」は作品の内部に求められる。この力は、他の文学作品も含む現実そのものに対して影響を及ぼし、それを破壊し、さらに来るべき高次の現実を創造するものであるとされる。そして、作品のこの「対立力」が生み出されるために必要なのは、まず作家自身が自らの作品に対して行使（opposer）する「抵抗力」（la force de résistance）なのである。

> また重要であるのは、作家が自らの作品に行使する抵抗力である。この力は、作者が作品で拒否する安易な手段や破格、作家が操る才能、作家が作品を統御する際の力強さを通して発揮される[19]。

こうして、「対立力」という革命的な力を備えた作品は、作家個人の「抵抗力」、つまり文学的な常套手段の使用や逆にそこからの逸脱といった安易さに流されずに己の作家としての天分を発揮する能力に基礎づけられる。

以上のように、33 年の革命家、36 年のテロリスト、37 年の作家は、一貫してロマン主義的な逃走の主体として現れる。そしてブランショは、「卑俗な現実」から逃れ出る「不可能な外部」として、彼らの洗練された人格を求めるのである。

3.2 「分派」の位置づけ

ブランショの「転向」をめぐる従来の議論において一種の定説になっているのは、「転向」に「分派」を重ね合わせる解釈である。つまり、ブランショの「転向」のテクスト的な指標として、1937 年 12 月の論文「分派者が求められている」[20]を位置づける見方である。まずは、従来の「転向」＝「分派」説の背景にある事情を確認していく。①伝記的事実。この説の大前提になっているのはまず、「分派」という概念を提出したこの論文が実質的に 30 年代にブランショが発表した最後の政治テクストであるという事実である。②「分派」という概念。この論文でブランショが提起する「分派」という概念は、後述のように政治的党派性の枠組みそのものに対する拒否が含意されており、それは自身の政治活動からの離脱の宣言として解釈された。これは、ブランショ自身が「分派者」であるとする見方である。③「革命から文学へ」との関連。1937 年 1 月の論文「革命から文学へ」は、冒頭で文学作品に対する党派的読解を退けている。党派性に対する拒否という点で「分派」との連続性が指摘され[21]、さらにそこから「文学への分派」という可能性も導かれる。④文学における恐怖政治（テロリズム）との関連。1941 年のブランショの文芸評論「文学はいかにして可能か」において論じられる「恐怖政治（テロリズム）」は、「分派」と同様の性質をもっているとする見方である[22]。ゆえに、これは 37 年の「分派」をブランショの文学的探求の中に位置付けることになる。

以上のような文脈で「分派」は「転向」に結びつけられ、論じられてきた。しかし本稿ではこの定説に対して異論を投げかけたい。つまり、1937 年 12 月のテクスト「分派者が求められている」を、30 年代の政治活動からの「決別の印」[23]として読み、そこでブランショは「自らの政治からの退出に形を与えている」[24]と考えることには無理があると主張したい。

「分派」はその根本的な部分で極めて 30 年代的と言わざるをえない。それどころか 37 年 12 月の時点でも、33 年の革命の論理がほとんどそのままの形で反復されているとさえ言うことができる。かつて、共産主義と順応主義に対する批判から自身の革命論を構築していたのと同様に、ブランショはまず実際の政治の現場で起こっている「分派」への批判から論を始めている。

党派から分かれ出る人々の大部分は、表面上その党派を捨てるに過ぎない。すでに作られた他の党派に加入するにしろ、新しい党派を作るにしろ、彼らは［…］うわべだけの理念と特定の利害で構築された、党派という寄せ集めに忠実なままなのである。（CP, p. 476.）

ここでブランショが問題にしているのは、分派ののちにできる新しい党派の内容ではない。その内容がどうであれ、分派者は結局「党派一般の観念」に忠実であることに変わりがないということが問題なのである。

党派の観念と分派の観念の間には両立不可能性が存在していると言える。本物の分派者が自らの党派に対して抵抗し始めるのは、［党派という］原理への不安に目覚めるときなのである。（*Ibid.*）

党派と分派は両立し得ない。つまり両者が同時に存在することは不可能である。それゆえ、「本物の分派者」は党派という原理がある限り不可能であり続ける。（「分派者とは「不可能なもの」の化身である。」[25]）この不可能性は、33 年に言われた革命の不可能性と完全に等価である。つまり、この世界が存在し続けている限り革命は不可能であるという革命の原理と同じ意味において、党派が存在している限り「本物の分派」は不可能なのである。

現実の交換において考察されるに値するものは、人々をある党派から他の党派へと移動させる誘惑ではなく、人々を全ての党派に対立させることのできる要求である。この対立には、全ての党派の上に立つのだとするプロパガンダの姿勢と共通するものが何もないのは明らかである。というのも、全ての党派の上に立つと主張することは、一般的に言って全ての党派に属することを意味し、より正確に言えば党派を何一つ動揺させないために何も行わないことを意味するからである。それは、無気力と政治的虚無の定式そのものである。実際のところ、重要なことは諸党派の上に立つことではなく、諸党派に対立することなのである。これは、右派でもなく左派でもなくという卑俗な合言葉を繰り返すことではなく、本当に右派に対立し左派に対立することなのである。（CP, p. 477. 強調引用者。）

全ての党派の上に立つ＝全ての党派に属することを、ブランショは「無気力」と「政治的虚無」として批判し斥ける。これは、かつて革命の主体的行為としての「拒絶」を、「順応主義の拒否」と「虚無主義の拒否」という二重の否定の要請として定めていたのと全く同じ身振りである。また、全ての党派に対立することは、党派という原理の中で

は原理的に不可能である。ゆえに、党派の原理の外部へと逃走することが求められるが、その外部は「右派に対立し左派に対立すること」のように欠性的にしか示され得ない場所である。つまりそれは「不可能な外部」＝「避難所」でしかない。逆にいえば、「不可能な外部」の存在、そしてそこへの逃走可能性を前提としているからこそ、ブランショは「本物の分派」の存在を名指し、求めることができるのである。

4. 逃走の不可能性

4.1 「牧歌」における不可能な逃走

「逃走」というテーマは、政治論文だけではなく「窮極の言葉」（1935 年）と「牧歌」（1936 年）というブランショの二つの初期虚構作品にも見いだすことができる。そのテーマは、最終的に「存在（現前）を逃れることの不可能性」に直面したと言われる『謎の男トマ』（1941 年）に継承されるものである。

ここでは「牧歌」[26]を取り上げる。この作品が書かれたのは、1936 年 7 月、つまり「テロリズム、救国の手段」においてブランショの言葉の暴力が絶頂を迎えていた時であるが、この虚構作品を支配しているのもまた暴力である。それは逃走を抑圧する暴力である。作品は、「異邦人」（étranger）がある町の「救護所」（hospice）に収容されるところから始まる。名前さえ持たないこの異邦人は、「救護所」の所長夫人に、突然「アレクサンドル・アキム」と呼ばれる。しかし、「この見知らぬ＝異邦人の名前（nom étranger）は、ほかの名前と同様に彼に適していた」（AC, p. 12.）つまり、アキムと呼ばれるこの人物は異邦性の形象として描かれている。ただ、この作品において異邦性は、単に「異邦人である、見知らぬ者である」という意味に限定されるものではない。「救護所」に収容されている異邦人たちの異邦性には際限がない。際限のない、全く終わりのない異邦性は、逃走の不可能性というレベルにまで高められている。

収容者＝異邦人は「自由」を求める。「今、ここ」ではない「外」への意識につねに釘付けにされている。つまり、収容者＝異邦人は逃走の主体である。しかし「いつぼくは救護所を出られるだろうか？」というアキムの質問に対し、所長は次のように答える。

> 「もっと後です」と所長は困惑した表情で言った、「もっと後です。それに、アレクサンドル・アキム、それはあなたしだいなのですよ。あなたがもはや異邦人であるという感情を持たなくなるとき、その時にはあなたが再び異邦人になっても不都合なことはもはやないのです。」
>
> 所長は笑った。アキムはその冗談に仕返しをしたいと思ったが、彼は悲しみに打ちひしがれるのを感じた。（AC, p. 32.）

異邦人が「救護所」を出ることを許されるのは、「もはや異邦人であるという感情を持た

なくなるとき」である。それが、「救護所」の「規則」や「管理法」（AC, p. 9., p. 26.）にとって「不都合」ではないからだ。実際、ある年老いた収容者は「救護所」から出ることを許可されるが、別れの儀式で所長が口にするのは「あなたは完全にこの地に馴化して帰郷するのです」（AC, p. 30.）という残酷な言葉である。物語が進むにつれ、主人公アキムは徐々に「救護所」の原理と収容者の運命を理解していく。彼は新しく「救護所」に連れてこられた異邦人に対して次のように述べる。

> 「君はこの家で、異邦人であることの辛さを学ぶだろう。それに異邦人であるのをやめることが容易ではないことも学ぶだろう。君が故郷をなつかしく思えば、ここでは日毎に多くの望郷の理由を見出すことだろう。しかし、もし君が故郷を忘れて、新しい滞在地を愛するようになれば、君は故郷へ返されて、そこでまた異邦人になり、新しい亡命生活をはじめることになるだろう」（AC, pp. 41–42.）

収容者たちは、終わりのない異邦性のうちに捕えられている。一見すると、収容者は上記の「分派者」の姿と重なっているように思われるが、そうではない。「分派者」は党派性の原理の外、つまり「不可能な外部」に向けて逃走することが求められ、実際ブランショはその可能性を主張していたわけだが、「牧歌」の世界では「救護所」の原理とその全体性が極めて強大であり、「外」の可能性は徹底的に排除されている。

象徴的なのが、逃走に失敗したアキムが処刑されるシーンである。物語はアキムが絶命し、葬儀が始まろうとするところで終わるが、その先の行方は物語の中で暗示されている。というのも、「救護所」のある町では、墓地は町の中央にあり、その周囲には塀がめぐらされているという描写があるからである。（AC, p. 29.）つまり、「外」への逃走を目指したアキムは逆に町の中心に引き戻され、永遠に異邦人として埋葬＝幽閉され続けるのである。死に至っても逃走は依然として不可能なままである。

「牧歌」は 30 年代におけるブランショの思考の歩みを考える上で重要な指標である。つまり、一方で 1936 年の時点でもいまだにブランショは「不可能な外部」への逃走可能性に基づいた政治言説を生産し続け、「卑俗な現実」の外にある「避難所」に逃れようとするロマン主義者であり続けていたが、他方で文学の探求の場においては逃走の不可能性という思考の方に接近しているのである。しかしながら、ここで重要なのは政治と文学という二つの領域ではない。問題になるのは、逃走とその不可能性の間で揺れ動いているブランショの思考である。

4.2 言語の問題へ

伝記的事実として、1938 年から 1940 年までの 3 年間、署名記事などのブランショの顕著な執筆活動はほとんど行われていないことが知られている。その後、ブランショは

1941 年から本格的に文芸時評の発表を始める。しかし、40 年代に入り、ブランショが文芸評論を専門的に執筆するようになったからといって、30 年代的な思考が消えたわけではない。たとえば、1940 年 4 月という比較的早い時期に発表されたロートレアモン論[27]には、「小説の名に値するが、通常のあらゆる約束事（conventions）や慣例的なあらゆる安易さ（facilités）を取り除いた作品」（FP, p. 197.）を目指す作家の努力を、ブランショが評価する一節が読まれる。あるいは、1941 年の評論でブランショは、「世界に対して何事かを成そうとする者は、世界と付き合うべきではない」（CL, p. 98.）というゲーテの言葉を引用しながら、作家の「内的必然性」（fatalité intérieure）（*Ibid.*）を創作の源泉に位置づけてもいる。これらの主張は、37 年 1 月の「革命から文学へ」における作家の「抵抗力」や、33 年の革命論における革命家の「人格」という発想と同様に、「不可能な外部」としての特権的な内面性を求めるというロマン主義的な思考に基づいている。

ところで、作家を論じることは不可避的に言語の問題を含みこむことになる。1941 年 5 月、ポール・ヴァレリーについての文章でブランショは、言語芸術を統御する「形式」としての「詩的秩序」（ordre poétique）を、作家の「内的必然性」として論じている。

> 形式の創造は芸術家の至高の任務である。そして彼にとっては世界の創造に対応するこの創造は、彼をある要求へと導く。その要求とは、言葉や文章の調子、文彩の選択、もし虚構作品であるのなら、登場人物と物語の性質そのもの、これらすべてが、内奥の企てあるいは内的な命令、つまりあらゆる創意の力に従う必然性の網に依存するべきである、というものである。（CL, p. 32.）

作家にとって「世界の創造」に値する「形式」の創造は、作家の「内的必然性」によってなされる。ここでは、作家の精神が「形式」（言葉）に対して超越的な審級として位置づけられている。では作家はいかなる「形式」を求めるべきなのか。作家が目指すべき最終的な「形式」としてブランショが提示するのは、ある絶対的な「法」である。

> ある法を発見することが必要なのである。その法とは、本物の芸術家に対してものの神秘への通路を開き、芸術家がそれを言葉の神秘によって表象することを可能にするものである。（*Ibid.*, 強調引用者。）

言語芸術を統御する形式の探求において芸術家が究極的に目指すべきなのは、ものそれ自体へのアクセスを可能にする「法」である。「もの」と「言葉」の両者に「神秘」（mystère）という同じ表現が用いられていることからわかるように、ここでブランショは究極的な「法」において両者は厳密に一致するようになると主張している。それゆえ、作家は言葉によって「ものの神秘」に到達し、言葉によってそれを表象＝代理（représenter）するこ

とができる。ここでブランショが求める作品は「絶対の本当の等価物」（*Ibid.*）、つまり言語の相対性を超克し、もの自体＝「絶対」に到達する作品であるが、この主張は彼の言語観に基づいていると言える。

言語と文学をめぐる以上のブランショの思考では、言語の世界の「不可能な外部」としての「ものの神秘」への逃走可能性が前提になっている。30 年代的なこの思考が変容する契機のひとつと考えられるのがジャン・ポーラン『タルブの花――文学における恐怖政治』（1941 年）を論じた「文学はいかにして可能か」（初出 1941 年 10–12 月）である。そしてその変容は第一評論集『踏みはずし』（1943 年）の巻頭論文「不安から言語へ」において象徴的に完成する。

ポーランは「修辞家」と「テロリスト」という区別、つまり文学形式・慣習を重視する古典主義的作家と、作家の内面性の発露を追求するために文学形式・慣習を拒絶するロマン主義的（恐怖政治的）作家という区別を立てるが、ブランショは恐怖政治を文学そのものの問題にまで拡張する。ブランショの評論の独自性は、そうして「ポーランの概念を［…］過剰なまでの定式化へと導くこと」[28]に存しているが、その「過剰なまでの定式化」には 1941 年当時のブランショ自身が上記のようにまぎれもない「テロリスト」であったことが影響しているはずだ。

> どのような作家の心にも、いっさいの文学形式を殺戮することを作家に強いる、また言語や文学との関係をどの程度絶っているかということのうちに自らの作家としての自尊心を感じることを強いる［…］悪魔が存在する。このような状況で、文学はいかにして実在しうるのか？作家は、言語の有効性を否認しているというひとつの事実によって他の人びとから区別されるのであり、作家の活動は、何らかの書かれた作品の形成を阻むことになるはずであるが、このような作家がいかにして、ついには何らかの文学作品を創造するに至るのか？文学はいかにして可能なのか？（FP, p. 97.）

絶対的な「ものの神秘」を表現しようとする「テロリスト」は自らの作品から使い古された常套句を排除するが、原理的に言葉は全て常套句的である。表題の問いが発せられるのはこの認識の地点においてである。文学の存立に関わるこの問題は、「不安から言語へ」に引き継がれている。そこでブランショは作家の不安について語る。ここでいう不安とは、「テロリスト」の不安であると同時に、作家の精神そのものでもある。

> 実際のところ不安には、神秘的な下部など無い。つまり不安は、それがそこにあると感じさせる自明さのなかに、十全に存在している。不安は、私は不安にとらわれていると人が語ったその時に、完全に現れているのだ。（FP, p. 20. 強調引用者。）

「神秘的な下部」とは「不安」という言葉によって表されている「もの」それ自体に対応するが、かつての「ものの神秘」の存在はここでは完全に否定されている。作家は自らの「不安」（それは感性一般でもある）そのものを書き出そうとするが、そのようなロマン主義的＝テロリスト的な態度に対して、ブランショは、「私は不安にとらわれているというこの言葉の中にあるもの以上のものは［…］何ひとつ無いのである」（*Ibid.*）と断言する。

> 作家の精神全体が言語である。この事実は以下のことによって第一に示される。つまり、作家が言うべき何ものも持たないのは、その手段が欠けているからではなく、作家に言いうる全てのことが、この無の意のままになっているからだ、ということである。そして不安は、不安の様々な一時的対象のなかから、この無を、作家に固有の対象として、作家の前に出現させるのである。（FP, p. 13. 強調引用者。）

「ものの神秘」を夢見る作家にとって言語などただの手段であって、それは「無」に等しいものだ。しかし、作家ができるのはまさにその「無」である手段をもてあそぶことだけであって、それ以上のことは何一つできない。この根源的な不可能性こそ、作家に固有な不安の対象となる。そして作家は言語という表現の手段の不充足に苦しんでいるのではなく、逆に無である言語の充足に苦しんでいる。レヴィナスの言葉を借りれば、このような作家の苦悩とは「もっとも根底的でもっとも仮借なき繋縛、自我が自己自身であるという事実」のことである。このようにブランショの言語観は変容し、言語の繋縛、そこからの逃走不可能性という地点にまで到達するのである。

5. おわりに――「転向」の問いに向けて

二つの逃走がある。本稿ではまず、レヴィナスの「逃走論」を参照して二つの区別を立てた。存在の有限性や不充足の感覚に起因し、「卑俗な現実」や「慣習」から逃れてその外部にある「避難所」を目指すロマン主義的逃走。そして、存在（現前）の充足性＝「終身性」、「自我が自己自身であるという事実」を断つことの不可能性から逆説的に求められる不可能な逃走。この区別を前提として 1930 年代から 40 年代にかけてのブランショのテクストを解釈すれば、その時期に起こった彼の思考の変化は前者から後者へという仕方で説明できる、そしてその変化がブランショの「転向」と呼ばれるものの実質的な意味である、というのが本稿の主張である。

もちろんブランショの執筆活動の領域は、政治論説から文芸評論、虚構作品の方へと変化しているのだが、そのときにブランショの思考で起こった変化を「転向」と呼ぶことは適切ではない。というのも、そこに明確で非時間的な「断絶」や「転換」、「飛躍」などは存在しなかったのだから。そこにあったのは、ブランショの探求や試行錯誤とい

う連続的な思考の営みの中で起こった「内省」や「深化」として記述されるべきものである。

世界の全体性を超越する「不可能な外部」（＝主体の特権的な内面性）を目指すロマン主義的な逃走の論理にブランショは長らく盲目的に捕らえられていた。逃走の論理は 40 年代初めの文芸評論にまで影響を及ぼしていたが、「牧歌」などブランショ自身の文学的探求やポーランをはじめとする論客との出会いの中で、ブランショは徐々に逃走の不可能性の自覚・内省を深めていったのである。この不可能性を起点として、以後のブランショの探求は行われる。ブランショの文学言語論は、かつての自らの言論活動とその挫折の経験から要請されているのである。

註

1 典型的な例が、1937 年のブランショの論文「革命から文学へ」を、「転向」の兆候として位置づけるものである。それはほとんど表題からの類推にとどまっている。cf. Mike Holland et Patrick Rousseau, « Topographie–parcours d'une (contre) révolution », in *Gramma*, n°5, 1976, p.41. UNGER Steven, *Scandal and Aftereffect: Blanchot and France since 1930,* University of Minnesota Press, 1995, p. 114.

2 Jean-Luc Nancy, *Maurice Blanchot : passion politique*, Galilée, 2011, p. 30. ジャン＝リュック・ナンシー『モーリス・ブランショ　政治的パッション』安原伸一朗訳、水声社、2020 年、p. 34.

3 *Ibid.*, p. 39. 同書、pp. 45–46. 強調原文。

4 Emmanuel Levinas, *De l'évasion*, fata morgana, 1982, pp. 71–72. 『レヴィナス・コレクション』合田正人編訳、ちくま学芸文庫、1999 年、p. 149.

5 *Ibid.*, p. 73. 同書、pp. 150–151.

6 *Ibid*. 同書、p. 151. 強調原文。

7 *Ibid.*, p. 69. 同書、p. 146.

8 *Ibid.*, p. 70. 同書、p. 148.

9 Maurice Blanchot, *Après coup*, *précédé par Le ressassement éternel*, Minuit, 1983, p. 92. 以下、AC と略記する。

10 Jeannine Verdè-Leroux, *Refus et violences: politique et littéraire à l'extrême droite des années trente aux retombées de la Libération,* Gallimard, 1996, p. 80.

11 Maurice Blanchot, « Le marxisme contre la révolution », dans *Chroniques politiques des années trente 1931–1940*, David Uhrig (éd), Gallimard, « NRF », 2017, pp. 100–113. ブランショの政治時評の引用はこの論集所収のものにより、以下 CP と略記する。

12 安原伸一朗は、ブランショの構想する革命を「理念上の虚構」であるとしている。安原伸一朗「どこにもない革命――1930 年代におけるモーリス・ブランショの政治時評について」『言語

態』2 号、2001 年、言語態研究会、p. 19.

[13] Christophe Bident, *Maurice Blanchot–partenaire invisible*, Champ Vallon, 1998, pp. 63-64. クリストフ・ビダン『モーリス・ブランショ　不可視のパートナー』上田和彦他訳、水声社、2014 年、pp. 70–71.

[14] *Ibid.*, p. 64. 同書、p. 71.

[15] Laurent Jenny, « La révolution selon Blanchot », dans *Je suis la révolution*, Belin, 2008, p. 124.

[16] Maurice Blanchot, « Le terrorisme, méthode de salut public », CP, pp. 376–380.

[17] Maurice Blanchot, « De la révolution à la littérature », *L'Insurgé*, n°1, 13 janvier 1937.

[18] *Ibid.*

[19] *Ibid.*

[20] Maurice Blanchot, « On demande des dissidents », CP, pp. 474–478.

[21] cf. 安原伸一朗「1930 年代から 1940 年代におけるモーリス・ブランショの「拒否」の意志」『言語情報科学研究』3 号、東京大学言語情報科学研究会、1999 年。

[22] cf. 内田樹「面従腹背のテロリズム――『文学はいかにして可能か』のもう一つの読解可能性」『言語と文学』書肆心水、2004 年。

[23] Christophe Bident, *Maurice Blanchot–partenaire invisible*, *op. cit.*, p. 101. クリストフ・ビダン『モーリス・ブランショ　不可視のパートナー』、前掲書、p. 101.

[24] Laurent Jenny, « La révolution selon Blanchot », art. cit., p. 125.

[25] *Ibid.*, p. 126.

[26] Maurice Blanchot, « L'idylle », AC. 引用に際しては以下の既訳を参照したが、訳語は適宜変更させて頂いた。『ブランショ小説選』菅野昭正・三輪秀彦訳、書肆心水、2005 年。

[27] Maurice Blanchot, « Lautréamont », *Faux pas*, Gallimard, 1943, pp. 197–202. 以下、FP と略記する。引用に際しては以下の既訳を参照したが、訳語は適宜変更させて頂いた。『踏みはずし』、粟津則雄訳、筑摩書房、1987 年。また、FP に収録されていない文芸評論の引用は以下の論集による。*Chroniques littéraires du Journal des débat. Avril 1941-août1944*, Christophe Bident (éd), Gallimard, « NRF », 2007. 以下、CL と略記する。

[28] Christophe Bident, *Maurice Blanchot–partenaire invisible*, *op. cit.*, p. 190. クリストフ・ビダン『モーリス・ブランショ　不可視のパートナー』、前掲書、p. 169.